

# 3・11の記憶

春の気配が日々濃くなるこの時期に忘れてはならない出来事「3・11東日本大震災」――。1・8万人を超える命を呑んだ地震と津波。自然の雄々しき、人間の無力さを知らしめる。天災は忘れないうちにやってくる。リアス海岸の三陸では波高が大きくなり、これまでも度々は犠牲をもたらした。

作家の吉村昭は、『三陸海岸大津波』を災害史として描き、三陸の地勢とそこに生きる住民の「よすが」を多重に綴った。よく言われるように、神社の海抜の高さは、津波による浸水を超える位置にある。津波伝承が神社ラインを形成した。安全安心のために高台移転が進められるが、日常の暮らしから海辺を離れない人も多い。同じく吉村は、田野畑での移住した病院長夫妻と地元住民の絆を物語『梅の蕾』を書き、エンディングではあつい涙を誘った。ちょうど春、いまの季節と重なる。

3・11は、世界一の大電力会社、東京電力の会社の根底を揺るがした。原子力発電所の脆弱性と危険性を露呈させた。首都圏の大停電と福島県には広域の放射能災害をもたらした。その余波は11年が経た今日でもなお残る。

地震の日、筆者は千葉市の大学建屋の1階研究室にいた。揺れはたいしたことにはなかったが、その後計画停電を経験し灯りが消えた。電車も走らず大学に3泊した。その時はちょうど、金属疲労の本を書いていた。3月14日には、震災後の東京の出版社に原稿を届け、その最後のページには、次の一文を書き残した。

「おわりに、本書の執筆にあたり……お礼申し上げます。また、この本の編集中には未曾有の大地震と大津波、そして福島原子力発電の重大事故が発生してしまいました。被災者の皆様の早期の回復を願います。また、犠牲になつてしまわれた御霊へは、今後はこのようになつてまいらぬことを誓います。」

## 地元力発見!

佐藤建吉 「洗楓座」代表

### 新聞

平成23年3月14日 佐藤建吉  
10周年となった2021年、筆者は「洗楓座」の活動として、3月から12月まで毎月11日に千葉県いすみ市で防災行事を開催した。筆者の居住地のいすみ市は、千葉県でも外房という太平洋に面した地にあり、地震と津波の危険性をいつも抱えている。そこで行事のテーマには「過現未による防災対策」を掲げた。

「過現未」は、過去・現在・未来を一体化した用語で、仏教界に由来するらしい。3・11の当日をこの防災対策のキックオフの日としたが、コロナ禍も広がっており、会場をいすみ市の太東埼灯台広場とし、いすみ市長にも参加して頂き開催した。4月からの毎月11日には、過去・現在・未来に関する講座を繰り返し3回ずつ行った(図表11左)。

- ① 3.11 / 《過現未》キックオフ・イベント@太東埼灯台広場
- ② 4.11 / 《過去》過去から学ぶ・・・究極の安全&防災対策とは?!
- ③ 5.11 / 《現在》「フェーズフリーとは?」
- ④ 6.11 / 《未来》「森の防波堤が守ってくれる」
- ⑤ 7.11 / 《過去》「展望室&FM局付き発電風車」
- ⑥ 8.11 / 《現在》「フェーズフリーと防災食」
- ⑦ 9.11 / 《未来》「森の防波堤の可能性(FS)」
- ⑧ 10.11 / 《過去》「洋上風力発電と産業の10次化」
- ⑨ 11.11 / 《現在》身近な暮らしにフェーズフリー
- ⑩ 12.11 / 《未来》「森の防波堤をデザインする」

### 記憶は未来を築くための情報に

筆者は、福島県立相馬高校が文科省のスーパー・サイエンス・ハイスクール(SHS)の実施校であり、相馬市を何度も訪ねた。3・11の前年の真夏には、相馬高校生徒とともに「アエロモベル」とい

う新交通システムの原理模型の走行実験を行なった。猛烈な暑さで水をしゃぶりながら行なった思い出がある。

その折に港湾事務所のある相馬港も立ち寄った。この事務所が津波の第1波で被災した、とのニュース映像をみた。相馬高校教師から、その事務所がPCを求め

ていると報告を受けた。筆者は大学の工学部に所属していたので、コンピュータの担当教員に相談し8台確保した。

当時、被災地への物資輸送は自衛隊が行っていたが、手続も面倒ですぐ現地に届かない。それで航空自衛隊元隊長の友人に話すと、自ら車で届けると。さすがに機動力は定年後も変わらない。しかし、相馬市までは放射能汚染のため茨木県や栃木県経由ではいけない。選んだ行路は、千葉市→埼玉県→群馬県→新潟県→福島県のコー

1950年山形生まれ。東京都立大院卒。元千葉大学院工学研究科准教授(金属疲労専攻)。金属疲労の研究のほか、他分野のテーマの研究開発に努めるとともに日本各地の地域おこし活動に従事する。ローカル鉄道と地元の酒蔵のコラボで地域再生を図る地酒「鐵の道」の製造・販売を企画、すでに10件を超える銘柄を送り出している。一般社団法人「洗楓座」代表。「全国ふるさと大使連絡会議」理事

ス。夜から朝にかけて移動しPCを手渡し、小休止しすべりターン。実は、このPCの提供に対して、福島県知事から4か月後の7月には感謝状を頂いた。その書状を画像ファイルにして「洗楓座」のHPを築くために必要な情報となる。

「過現未による防災対策のキックオフの日、洗楓座の企画で太東埼灯台広場には、災害を鎮めてくれる妖怪「アマビエ」にちなみ、地元由来の妖怪「トリビエ」(\*)を防災祈念に設置した。1・2層もある大きな木像彫刻で、チェンソーカービングで制作したものである(写真1、2)。これは、灯台広場への来客が記念写真を撮るアイテムともなっている。安全安心を願う地元の証しといえるだろう。



写真1-1 キックオフの日(制作者木村廣志氏と太田洋いすみ市長(右)写真2-1 安全安心の妖怪「トリビエ」の木像



(\*)2020年にいすみ市で2回も発生した鳥ウィルスにより、220万羽のニトリが犠牲になったことを悼み、「アマビエ」を、頭部にトサカを配して「ニトリ」に似せ、とくに「トリビエ」と名付けた。